

博士学位論文審査要旨

2014年7月22日

論文題目： カール・バルトにおける神論研究
— 神の愛の秘義をめぐる考察 —

学位申請者： 山尾（稲山） 聖修

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 三宅 威仁

要 旨：

日本におけるカール・バルトの受容は1927年に遡るが、そのバルトは近代プロテスタント神学を根底的に批判した「弁証法神学運動」の指導者の姿を持っていた。しかし、当時の青年神学者たちによるこの運動は堅固な神学の学派としてのものではなく、内部に軋轢と不一致を伴っていた。本論文はステレオタイプに陥った日本におけるバルト受容の修正を目指して、歴史的・体系的にバルトの思想の解明を志したものである。

第一章では、メランヒトン以降シュライアマハーにいたるまで等閑に付されてきた三位一体論をバルトがドルナーを引き継いでその神学の中心軸に据えたことがパネンベルクの指摘を受け入れつつ紹介され、バルト神学の解釈における新たな方法論上の地平を開拓する。さらにバルタザールを参照しつつ、初期の神学から後期にいたる彼の神学的作業を思想の深化と発展と捉え、その中核部分に位置する神理解を『知解を求める信仰』と『教会教義学』の神論の解読に求める姿勢を明らかにする。

第二章では、バルトと近代プロテスタント神学との関係を対立の構図ではなく批判的な継承として見る視点から、バルトの時代に19世紀神学を批判する用語であった「文化プロテスタント主義」、ならびに類似する諸概念をグラーフの業績を参照しつつ検討する。そして、神に背を向け文化に順応したキリスト教というほどの意味を持つこの用語の対象は曖昧であり、19世紀には神学と教会の理解をめぐる多様な潮流が存在していたことが確認される。相互に緊張関係にあったそれらの潮流を拡大解釈して近代全般の神学的傾向として一括りに表現した結果、厳密な学術的用法ではなく不明瞭な文明批評的な様相に陥ったことが示される。

第三章では、シュライアマハーは主観的な経験に基づく神学を提唱し、それを克服したのはバルトであるとするとりわけ本邦における理解を取り上げ、バルトが一貫してシュライアマハーの神学に敬意をもって接してきたこと、さらに両者にキリスト論を分水嶺にするにしても連続性があることを示し両者を対立と断絶ではなく発展として捉えようとする様が描かれる。そして、「神の人間性」に考察の重点を移していった『教会教義学』形成時のバルトにおいて、人間とその文化という課題が再吟味されるにいたることが示される。

第四章では、『知解を求める信仰』におけるアンセルムス研究を通して得られた神認識に対する問題意識を『教会教義学』の神論に焦点を当てて、秘義という視点からその解明を試みる。そして、その秘義自体が人間の罪性によるものではなく、神の自存性、すなわち神の自由によるものであり、その内実を愛として捉えるバルトの内在的三位一体論が詳細に案内され、神の隠れをも包含する啓示理解に光が当てられる。さらに、秘義概念の検討を通して得られたこの理解に

基づいて、受肉者たるイエス・キリストの事跡の意義が語られ、最後にシュライアマハーとも相通じる「聖霊の神」への関心がバルトの神学にあることを指摘する。結びでは、日本におけるバルト受容に見られる特殊性を非キリスト教的諸宗教、諸文化との緊張関係による弁証的姿勢に淵源するものであり、バルト神学の中正な受容が今後なされるべきことが期待と共に語られる。

本論文は、日本のプロテスタント神学に多大な影響を与えてきたカール・バルトの神学思想が類型的に処理される傾向に陥っている問題を克服することを課題として、近年の研究とテキストの読み込みを通してそれを明らかにしようとした労作であり、多面的で容易に見渡すことのできない広がりを持つ論題の個々に立ち入って詳細に分析したことは高く評価することができる。よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2014年7月22日

論文題目： カール・バルトにおける神論研究
— 神の愛の秘義をめぐる考察 —

学位申請者： 山尾（稲山） 聖修

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 三宅 威仁

要 旨：

山尾（稲山）聖修氏は、1998年4月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程から後期課程に進学し、研究指導を受け、所定の要件を満たし、退学の期間を挟んで2008年4月に復学した後2011年3月に退学し、このたび学位論文を提出した。2014年7月22日(火)13時より2時間、神学研究科委員会は総合試験を実施し、山尾（稲山）氏から20世紀のドイツ語圏プロテスタント神学、ならびに組織神学の当該領域について十分な神学的素養を有することを確認した。本論文に駆使された文献類を見ても明らかなように、ドイツ語と英語の高度な能力を有している。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 「カール・バルトにおける神論研究—神の愛の秘義をめぐる考察—」
氏名： 山尾（稲山）聖修

要旨：

わが国におけるバルト神学受容には、概して二つの窓口があったとされる。高倉徳太郎及びその弟子を中心とした東京神学社における動きと、同志社における動きである。高倉の場合、その著書『福音的基督教』においてはブルンナーとの対比において論じられるに留まるのに比して、同志社のそれはまとまった「文章」として議論された。その道筋は、1927年11月刊行の『基督教研究』第5巻に掲載された、大塚節治による「弁証法神学」の紹介と、魚木忠一のバルト神学への論評に明らかである。

バルト神学が日本に紹介された1920年代は、バルト自身、世にいう「弁証法神学者」として活躍した時期にあたる。とは言え、「弁証法神学」という呼称は、実のところ、後のバルト本人の言葉によれば、バルトによる自称でなく、あくまでも他称に過ぎなかった。この主張に則するならば、弁証法神学とは、19世紀の学術的伝統を継承した、確たる学派としての自由主義神学への批判的態度を含みつつ、弁証法神学を構成する神学者各々の多様な神学的立場によって成り立つ、青年神学者の流動的な学術グループによる運動としての解釈も可能である。その姿勢には、既成の神学に対する批判的な態度こそあれ、19世紀の神学にとって代わるだけの、神学上の構成員を有することは困難であったと本論筆者は理解する。

このような時期を経て、バルトは新たな神学的着想を得るべく様々な試みを行う。時を経るに従い弁証法神学に距離を置いていったバルトに、異なる刺激を与えたのは、第一には、初期スコラ神学者である、カンタベリーの聖アンセルムスの著作、第二には、かつてバルトが新約聖書の『ローマの信徒への手紙』の斬新な講解として名声を博した『ローマ書』の版を重ねた折にも、少なからざる葛藤とともに関わり続けたシュライアマハーの神学思惟である。

日本では、聖アンセルムスの神学とシュライアマハーの神学による刺激に基づいて展開された「後期バルト神学」について、聖アンセルムスの神学は評価の対象となっただけのもの、シュライアマハーの神学思惟は、1920年代の弁証法神学の影響を強く受けた結果、バルト神学と相容れない立場であるとの誤解すら生じていた。とりわけアジア・太平洋戦争後は、バルトのイメージは、神との垂直的な関わりを強調し、オーヴァーベックやキルケゴールの影響を受けた「神は神」、「人は人」、「危機」、「神と人との無限な質的差異」といった文言とともに、常に時代精神に批判的な神学者というものであった。そればかりか、時には、神学思惟そのものより、第一次世界大戦にいたるまではスイスでの労働運動に積極的に関わった牧師として、そして、第二次世界大戦終結までは、ナチ政権への抵抗運動を導いた神学者として、闘争的な一面が強調された。バルト神学へのアプローチを試みる以前に、その歴史的背景に関心が寄せられる余り、バルト固有の神学思惟が曲解されるならば、それはバルト神学への重大な誤解へとつながりかねない。

本論筆者は、以上の問題意識を抱きつつ、バルトが『教会教義学』で展開した神学思惟の方法論の背景をめぐり、19世紀から20世紀初頭の神学者が用いた「近代プロテスタント主義」、「自由主義神学」、「文化プロテスタント主義」といった概念について、フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフの論文を通して慎重に吟味し、バルト、あるいはバルトの関係した「弁証法神学」が批判した神学の特徴を把握する。そして、バルトが、シュライアマハーから受けた神学的影響を念頭に置きながら、後期バルト神学を特徴づけている『知解を求める信仰』への考察をへて、『教会教義学』における「神論」における秘義概念を明らかにする。この考察の結果、本論筆者は、

バルトの神学方法論を辿りながら、秘義概念に依拠し、「内在的三位一体論」と「受肉論」との関係、そして、「神の隠れ」概念と神認識の道筋への考察を行った。本論筆者は、この考察を通して、バルトがシュライアマハー神学に深く敬意を表しながら、その神学を発展的に解釈した経緯を確かめた。

さらに本論筆者は、バルトによる講演『神の人間性』において、バルトが文化や神学、また、弁証法神学との関わりの中では批判的に向き合った自由主義神学者への態度を修正し、「神の神性」に基づいた「神の人間性」概念を提唱することにより、弁証法神学の感化を受けた時代からひきずっていた神学思惟上のアポリアを克服しようと試みている点、そして『教会教義学』『神論』の出版期に行われた、バーゼルのミュンスター教会での礼拝説教も含め、バルトのテキストを用いつつ、キリスト論を媒介にした聖霊論の可能性を考察した。

その結果明らかになった事柄とは、バルトの神学的方法論とは、シンメトリックな構造とは程遠い、三位一体論に基づいて規定される、蝸牛状の神学思惟を有する点、そして、バルトがシュライアマハーを批判する際には、極めて慎重な姿勢を保ちつつ、20世紀神学にいたるまでの影響を高く評価している点、また、「冠」あるいは「絶対依存」といった、シュライアマハー神学のキーワードを、自らの神学の中で発展的に用いている点である。さらに、バルトの神学思惟には、シュライアマハー神学の可能性としての「聖霊論」に基づいて、神認識のわぎの理解を試みていることが推測できる。本論筆者は、この特質を前提としつつ、バルトの論じる神認識では、単なる形而上学的思惟ではなく、「信仰命題」として種々の神学思惟の課題が論じられているところに特徴がある点を見出した。この神学思惟の特質には、バルトが聖アンセルムス研究から得た着想が反映されている。バルトは、秘義概念の中に包括された内在的三位一体論に依拠し、その一体性を強調することで、神の単一性概念を強化する。同時に、内在的三位一体論の三位性における、キリスト論に重点を置くことを通じ、御子イエス・キリストの受肉の秘義への道筋を拓く。その結果、イエス・キリストにおいて、文化や諸宗教も含めた人間論が、発展的に理解される。他方、「神論」で展開される神認識が、被造物であると同時に、罪人でもある人間によって遂行される点をバルトは視野に定める。この人間が、神認識のわぎに携わる場合には、「神の隠れ」に出会う、とバルトは論じる。バルトは、「神の隠れ」との出会いから神認識は出発するとの主張に立つ。これが、神の愛の秘義における神認識の始まりである。

従来の一般的なバルト研究では、バルト神学の集大成として『教会教義学』の「和解論」が特別の地位を占め、この神学思惟を中心に後期バルトの著作、また『教会教義学』を読み解くことが研究手法の王道とされてきたが、筆者は、本論文の構想段階から、この王道に則した考察をあえて外した。その理由としては、後期バルト神学思惟の揺籃期の研究が本論文の主たる内容であり、第二次世界大戦後に執筆された「和解論」は本考察の範囲外であったことにもよる。その結果、本考察を通じ、シュライアマハーの神学を始めとした近代プロテスタント主義神学との発展的な関連の中で、バルト神学における秘義概念の豊かさを再発見することができた。

さて、バルトが、神理解の際には不可欠と見なす三位一体論を、あえてペルソナ概念を用いて展開せずに、「存在様式」概念を用いての理解を試みたという着想には、近代プロテスタント主義に立つ神学者の中では、イーザーク・アウグスト・ドルナーの影響があると、パネンベルクは指摘する。本論筆者の理解に則すると、バルトは、存在様式概念を、神の単一性と三位一体性との関係を説明する概念として用いることにより、その曖昧性によって歴史的に数多の神学上の論争を招き、ペルソナ概念の使用を避け、世界教会としての宣教について言及する突破口を構想していた可能性を指摘する。本論筆者によるこの指摘が妥当するならば、バルトは「神論」の執筆と出版の時点、則ち、第二次世界大戦前夜から、枢軸国優勢期にかけて、すでに秘義概念に依拠した聖霊論理解に則し、西方キリスト教世界のみならず、その時代はソビエト連邦とその衛星国の勢力圏に属していた、東方キリスト教世界をも含む、世界教会の構想を練っていた可能性を指摘する。これが本論文の結論である。

以上の結論を踏まえ、本論筆者は、啓示概念との関わりの中で理解される秘義概念において、「隠れた神」の姿のもと、被造物たる人間と創造主たる神は、その関わりを保持する点について、バルトがさらに神学思惟を深化させる道筋を指摘する。但しバルトの当該神学思惟の考察に関しては、「神論」に続く「創造論」での人間論の考察が不可欠である。残念ながら、その範囲は本論文の射程を超えている。しかしながら、本論筆者の研究の今後の展望の中では、神と人間との関わりは、創造論、キリスト論の道筋を経て、最終的には聖霊論に基づいて論じられる。聖霊論は、バルトの『教会教義学』では執筆が未完となった。しかしながら本論筆者は、『教会教義学』での聖霊論をめぐる断片的な論述を含め、バルトの種々の講演や論文、また説教を資料と用いての再構成が可能であると考え。この未完の神学思惟をめぐり、バルト神学そのものに依拠した研究を今後の課題とする。